

は し が き

第一巻と同様に、われわれの仕事は、テキストの持つあらゆる‘implication’を‘explicate’するために、まず輪読会で注を必要とする箇所をカードに拾って、それを他のメンバーに回し、それぞれが書き加え、最後に吉田安雄氏に間違いは訂し、足らざるは補ってもらい、われわれ三人が整理・清書するという段取で進められた。そして“Introduction”として、Fanny Price についてのエッセイを多田が担当し、挿絵の解説を坂本が書くことにきめられた。しかしわれわれの作業は当初は遅々として進まず、成行が大いに案じられたが、夏休とともに、多田が吉田氏と六回も会合して、漸く軌道にのり、休暇の終り頃には峠を越した状況にまで辿りつき安堵したことを覚えている。整理に当たったわれわれに一言いわせて貰えば、吉田氏をはじめ、他のメンバーの書込みにわれわれが学び得たことは決して少なくないということである。われわれの仕事は、それらの説を能う限り生かすことにあったが、本書の性格上、整理の段階で割愛せざるを得なかった場合も少なかったことは心残りのことであった。

われわれとしては、本務の間隙を縫って最善を尽した積りではあるが、一同 Austen を読み始めてまだ日が浅く、誤りや不備な点が多々発見されるであろう。大方の忌憚なき御教示を賜れば、一同の幸いこれに過ぐるものはない。

本書の刊行は、関西大学研究成果出版補助金規程によるもので、この研究成果を理解しお認め下さった同大学出版委員会の方々、並びに出版の実際面でいろいろとお骨折りに頂いた出版部の内田兼俊、

iv

田尾馴次、井内雄二の諸氏に厚く感謝申し上げたい。

1982年3月

小川 静 代

多田 敏 男

長谷川 存 古

CONTENTS

| | PAGE |
|----------------------------------|------|
| はしがき..... | iii |
| TEXT について..... | vii |
| INTRODUCTION | viii |
| MANSFIELD PARK VOL. II | 1 |
| NOTES | 175 |
| NOTES ON THE ILLUSTRATIONS | 359 |

LIST OF ILLUSTRATIONS

- The Topaz Crosses **Plate 1**
- The Leader **Plate 2**
- A Scene in a Card Room **Plate 3**
- Ball Dress **Plate 4**
- Midshipman and Lieutenant **Plate 5**

ACKNOWLEDGEMENTS

We are indebted to the following publishers for their courteous permission to reproduce the above illustrations; the Hamlyn Publishing Group Ltd., London, New York, Sydney, & Toronto, for Plates 1 and 3; the Yale University Press, New Haven and London, for Plate 2; the Oxford University Press, for Plates 4 and 5. As to the sources of the illustrations, see the 'Notes on the Illustrations.'

TEXT について

現在容易に入手できる *Mansfield Park* のテキストは数種に及ぶが、本書のテキストは、R. W. Chapman 校訂の *The Oxford Illustrated Jane Austen* (1978), John Lucas 校訂の *The Oxford English Novels* (1970), Tony Tanner 校訂の Penguin 版 (1966), R. B. Johnson 校訂の *Eveymans Library* 版 (1955) の *Mansfield Park* を比較検討して、まとめたものである。これらのテキストに時としてみられる異同に関しては、適宜 NOTES に記しておいた。

INTRODUCTION

Fanny Price について

ロンドンからやって来て、ここ Northamptonshire, Mansfield Park の牧師館に兄と一緒に寄寓することとなった Miss Crawford は、日ならずして、Bertram 家の兄弟姉妹たちと親しくなるが、唯彼らの従妹の、18才になった Fanny について、「もう社交界へ出ているのか、それともまだなのか」¹⁾ 見当がつかない。Fanny が牧師館に招ばれたことから察すると、もう社交界に出ているとも取れるし、人前で殆ど口をきかないところをみれば、まだ社交界へは出ていないとも取れる。年格好からすれば、社交界に出ているのもちっともおかしくないのに、都会育ちで社交に慣れた Miss Crawford には、このことが不思議でならない。

Miss Crawford は、Fanny のこのような印象を、この時点では、²⁾ 社交界に出ているか否かという世間のしきたりのみのせいにしてい

-
- 1) 関西大学ジェイン・オースティン研究会編 *Mansfield Park* (Vol. I) by Jane Austen (Kansai University Press, 1981) p. 59. 以下テキストよりの引用は、Vol. I, Vol. II に関しては同研究会編テキストにより、Vol. III に関しては、R. W. Chapman (ed.), *Mansfield Park* by Jane Austen (O.U.P., Third ed., 1934) によって、引用の後に巻数及び頁数を記すことにする。
 - 2) 後になって、Edmund が伝えるところの、Miss Crawford の Fanny 評は、Fanny の人目を引きたくないという、控え目な性格

るが、その原因は、一つには Fanny の境遇のせいであり、又一つには彼女の生来の体質や性格が大いに関係している。彼女は、Sir Thomas が、貧しき縁者の家計を援助するために、その養育を引き受けた姪であって、Bertram 家の人たちに（伯母の Mrs. Norris を除いては）別に彼女を冷遇する意図は見られない。しかし、Bertram 家の子女たちと彼女との扱いには一線を画しておかねばならないというのが、Sir Thomas の当初の方針であって、それも無理からぬことと考えられる。作中に、‘she (=Fanny) thought too lowly of her own claims’ (I, 22—23) とか、‘she thought too lowly of her own situation’ (I, 42) といった表現が Fanny に関して何度も繰り返されるのも、このような彼女の境遇の、彼女の側における、反映と考えられる。又彼女が Bertram 家に引き取られてきたのは、彼女が10才の時であったが、その時からして彼女は「顔色が悪く、極めて臆病で、おずおずとして、いつも人前から逃げる」(I, 12)性格であった。時には「物静かな受け身的な態度」(I, 16)と呼ばれるこの性格は、疲れ易い虚弱な体質と共に、簡単に変るものではない。そのような境遇やら、体質や、性格で、例えば、舞踏会といった娯楽に、彼女は長らく参加させて貰えない。いつも従兄姉たちからの報告に満足して、それ以上に関心を抱かないのが、彼女にあってはごく当り前のことなのである (I, 42)。このようにして、彼女は作中のいろんな出来事に参加したい時も、境遇や健康上の理由で参加を阻まれたり、また逆に周囲から参加を強く要望されながら自分から参加を拒否したりして、いつも出来事の

をよりの確に伝えている。Cf. ‘Miss Crawford was very right in what she said of you the other day —that you seemed almost as fearful of notice and praise as other women of neglect.’ (II, 198)

園外に留まるのが、彼女の生活に繰り返されるパターンといて差し支えない。作品の比較的始めの方に、Edmund が Fanny の馬を Miss Crawford に貸し与え、Edmund と Miss Crawford が中心となって、牧師館の人々と共に、乗馬を楽しむ光景を、丘の上から Fanny が淋しく見詰めている場面が見られる (I, 83-84)。Edmund は唯新来の隣人に親切な行為に及んだだけのことと言ってしまえばそれまでだが、秘かに Edmund を慕っている Fanny の心中は決してそのように穏かなものではない。しかも彼女は一団の人々の楽しそうな声を遠くに聞き、その光景を目の当りに見るだけで、それ以上に踏み込もうとはしない。それは、Fanny の今後を予想させる、最初の象徴的な場面と言っても決して過言ではない。Sotherton 訪問の一行に、Edmund の計らいで、Fanny も一応参加させて貰ったが、一行が三々五々、garden から wilderness へ、そして park へと出掛けた時、Fanny はその途中でベンチに掛けて休まざるを得ない仕儀となる。Fanny の疲労を見越して、Edmund がそのように忠告してくれたからである。彼女は「もっと強かったらと残念がっている」(I, 121) から、彼女も皆と一緒にもっと散策を続けたかっただろうに、彼女には唯後に残って皆が「角をまがって見えなくなるまで見詰め、声が聞えなくなるまで一生懸命聴き入る」ことしか許されない。また「素人芝居」(private theatricals) の一件では、ある端役を演ずることを強く要請されながら、Fanny は「たとえ全世界を下さるとおっしゃっても、私にはとても演じられません」(I, 185) とか「どうか勘弁して下さい」(I, 185-186) といった言葉を繰り返して逃げ廻り、参加を拒否している。彼女は芝居そのものを嫌っているのではない。皆のリハーサル風景を眺めたり、時には批評を加え、後見役を買って出たりして、彼女も観ることは大いに楽んでいる節が見られる。それなのに演じることをかたくななほどに拒否して、彼女のいわば「ひとりだけの部屋」或い

は「憩いの部屋」とも言うべき ‘the east room’³⁾に引き籠ってしまふ。

第Ⅱ巻に入ると、Maria の新婚旅行に、妹の Julia が同行したために、Bertram 家は一時は火が消えたように淋しくなり、必然的に Fanny の存在がクローズアップされ、彼女の ‘consequence’ (Ⅱ. 40) が増大した、という。Mansfield Park に登場以来これまで顔色の悪かった Fanny が、その complexion に色つやが増し、前よりも健康的になったことに、帰国早々の Sir Thomas が逸早く気付くばかりでなく、Edmund も Henry Crawford もそのことに注目し始める。やがて牧師館との交際が元の状態に復し、海軍士官候補生である Fanny の兄 William が休暇を得て来訪し、Mansfield Park で舞踏会が催されたり、様々な出来事が続く。それらの場面で、Fanny は ‘the principal lady’ (Ⅱ, 63) 或いは ‘the Queen of the evening’ (Ⅱ, 119) として、漸く一篇のヒロインたるに相応しい扱いを受け、恰も彼女が中心人物としてこれらの出来事に喜々として参加しているかのような印象を与えもする。しかし彼女は本当にこれらの出来事に中心人物として参加していると言っているのだろうか。

Lady Bertram は、Fanny が牧師館から晩餐会に招待されたこと

3) Fanny が参加を拒否し、逃げ込むのは、いつもこの ‘the east room’ であり、そこは彼女の生涯の思い出の品々が飾られ、いわば昔を振り返り今を思い、誰にも入れない彼女の心の聖域を象徴する部屋である (但し、実際には Miss Crawford と Edmund が芝居のリハーサルに彼女の助けを求めて入って来ているし、また別の機会にも何度か Edmund は訪れている。そしてまた Sir Thomas が Henry Crawford の来意を告げに彼女を探し求めて来たこともある。しかしその何れの場合も、Fanny の運命に深くかかわる「事件」であることは説明を要しない)。

をいぶかる(Ⅱ, 55)。彼女のいぶかりも無理からぬところで、そのように Fanny を名指しての招待は、これまでついぞなかったからである。また Sir Thomas が牧師館との交際の再開を推進するばかりでなく、舞踏会までもわが家で開くに到ったことは、これまで静けさをこよなく愛してきた厳めしい Sir Thomas のことを考えれば、あり得ぬことで、Fannyにとっても、少なからざる驚きであっただろう。何も知らない Lady Bertram や Fannyには、思いも寄らないことが相次いで起るわけだが、早々と読者に知らされることは、1) Mrs. Grant が妹の Miss Crawford の田舎生活のわびしさを紛らすために Fanny との交際を推進しようとしていること(Ⅱ, 40)、2) Edmund が Miss Crawford の結婚の真意を確かめようとして、少しでも多く彼女に接する機会を得ようとしていること、3) Henry Crawford が Fanny を特に 'distinguish' (Ⅱ, 82) していること、そして 4) Henry Crawford のそのような行為をそれとなく察した Sir Thomas が、Fannyにとってまたとない良縁として、大いにその関係を支援しようとしていることなどである。第Ⅱ巻に展開される出来事は、つまり、これらの人々の思惑と画策の上に発展するのであって、そこには Fanny の積極的な参加の意志は関与していない。それどころか、彼女の個々の行動には、例えば晩餐会でも、応接間に移るだけの仕草に異常なほどの緊張がみられ、人々の談笑が始まるや否や、それ幸いとばかりに一人離れて隅に隠れたり(Ⅱ, 63—64)、トランプ遊びでも、Henry Crawford に加勢して貰わねばならないほどに、遊びそのものには熱中していないし、舞踏会に Henry Crawford と先頭に踊らねばならないことに、常日頃口答えしたことのない Sir Thomas に向ってすら抗議するほどに(Ⅱ, 131)、この上もない戸惑いを示す。そして Henry Crawford がついに求婚に及んだ時、Fanny は、全く Sir Thomas の思惑や期待を裏切って、どうしてもそれを受けようとはしない。つまり、

第Ⅱ巻における様々な出来事は、結局 Edmund の Miss Crawford への求婚と併行して、Henry Crawford の Fanny への求婚のためのお膳立として目論まれたもので、その最終の目的である Henry Crawford の求婚に Fanny が応じなかったことによって、それまでの様々の出来事への、言わば、見かけ上の参加は一挙に帳消しになってしまうのである。

第Ⅲ巻での大きな出来事と言えば、Fanny が暫らく Portsmouth の実家へ送られるということであろう。貧しい実家へ戻れば、財産と閑暇がいかに貴重なものであり、Henry Crawford の求婚が彼女にとっていかに有利なものであるかが、改めて思い知らされるであろう、というのが Sir Thomas の狙いである。ところで実家に戻れば、Fanny は、却って長い間眠っていた肉親への愛情に目覚め、どんなに貧しくとも、故郷に帰った寛ぎと仕合せに浸る結果を招くのではないということも当然考えられる。事実、Fanny 自身がそのような期待に胸ふくらませながら、故郷への旅路を急ぐ。ところが彼女が実家に発見したものは、貧困故の窒息しそうな環境であり、そして殆ど彼女の存在を忘れたかのような扱いでしかなく、彼女は自分が恰も歓迎されざる余計者でしかないような意識にとらわれる。つまり、彼女は実家に溶け込もうとしても、どうしてもその参加を阻まれてしまうのである。そして彼女は（唯妹の Susan を除いて）家族全員に批判的な目を向け、ここには喧噪と野蛮だけが支配しているけれど、Mansfield Park には ‘elegance, propriety, regularity, harmony, peace and tranquillity’ (Ⅲ, 391) があつたなどと懷んで、ついには Mansfield Park こそ自分の故郷だとして、そこに帰れる日の一日も早からんことを願う仕末である。彼女は別に上品振ったり、嘘を言ってるのではない。それが彼女の偽らざる言葉だとしたら、Sir Thomas の予想は正的中したとも言える。にも拘らず、時として、彼女が批判する実家の人々こそ却っ

て自然で健康であり、彼女自身の不平不満が唯贅沢な愚痴に聞きなされるのはどうしたことだろう。彼女のこの側面をとらえて *snob* と称する批評家が出てくるのも至極当然のことと言わざるを得ない。だがわれわれの仕事は、彼女を *snob* と称して切り捨ててすむのではなく、彼女のこの参加しようとして参加し得ない性格に一体何があるのかを更に探求することに向けられねばならない。

これまで *Fanny* の、出来事を前にして、一瞬佇んだり、後ずさりしたり、参加することに抵抗する、言ってみれば、彼女の臆病な側面のみを強調してきたきらいがあるが、ここでは更に、その側面に併行し付随する、別の面を見ないわけにはいかない。ここにいう別の面とは、彼女がこのように後ずさりすることによって、出来事に目を背けているわけではなく、というより、全く不思議なことではあるが、いろんな出来事を、行為の当事者が思いも寄らないほどに、彼女が見、聴き、感じ取っているということである。確かに、*Fanny* は様々の出来事に参加してはいない、しかし、それらの出来事の間に散見される、*attentively listening* (I, 69) / *she could not help watching all that passed* (I, 83) / *she saw it, or the imagination supplied what the eye could not reach* (I, 84) / *Her eye was eagerly taking in every thing* (I, 103) / *to Fanny's observation* (I, 131) / *She would never see Mr. Crawford with either sister without observation* (I, 147) / *(she) could not help wondering as she listened* (I, 148) / *this dialogue ... were forced on her* (I, 149) / *Fanny could listen no farther* (I, 150) / *Fanny, who had heard it all,* (I, 163) / *Fanny looked on and listened* (I, 167) / *a quiet auditor of the whole* (I, 174) / *Fanny's eyes followed...* (I, 177) / *Fanny saw and pitied much of this* (I, 207) / *a very courteous listener* (I, 209) / *Fanny's sick feeling subsided* (II, 9) / *Not less acutely was*

it felt by Fanny, who ... saw all that was passing before her (II, 14)/ Fanny's heart beat quick (II, 47)/ to Fanny's eye (II, 51)/ sorrowful food for Fanny's observation(II, 52)/ the fairest prospect of having only to listen in quiet (II, 64)/ ...

といった類いの章句を、われわれは見落すわけにはいかない。⁴⁾ それらの章句は、そこに Fanny が目立たなく存在し、彼女がそれらの出来事を見且つ聴いており、それらの出来事が彼女の意識に記録されたことを意味すると見ない訳にはいかない。つまり、彼女が見まいとしても勝手にそれらの出来事が彼女の目に、そして耳に飛び込んで来て、彼女を圧倒してやまないということである。或いは別の表現をすれば、そのように彼女が見、聞き、感ずるからこそ、参加が阻まれると言ってもいいくらいで、いずれが原因でいずれが結果であるとして一概に決めることが難しいほどに、両者の行為が混然と同時的に併行するということである。Sotherton で Maria が Henry Crawford と一緒に、「隠れ垣」(ha-ha)を飛び越えて park の方へ出ようとした時、「Bertram 嬢、あなた怪我しますよ、忍び返しに引っ掛かって怪我しますよ、——ドレスを引き裂きますよ、——隠れ垣に滑り落ちますよ。行かない方がいいですよ」(I, 125)と思わず Fanny が Miss Bertram に忠告するが、婚約者以外の男と park へ入って行くことが何を意味するかを Fanny は察していただろうし、その忠告は単に衣服を引き裂いたり、怪我に対するものだけではなくた筈だ。また、皆が素人芝居でおおわらわの中にあって「多少隠されているものの、当事者すべてを支配しているかに見える利己心」(I, 168)を彼女は見抜いて、芝居を見たいという心理と、認

4) これらの章句が散見され始めるのは、勿論 Fanny が18才になってからのことであり、つまり Vol. I, ch. V 以降においてである。

めてはならないという心理が、妙に彼女の心の中で交錯する。また第Ⅱ巻のトランプ遊びの場面でも、Fanny は、どうしても耳が Edmund と Henry Crawford とが Thornton Lacey（それは Edmund が近い将来牧師として勤務することが予定されている場所である）について話している方に向うのを必死に隠すためにトランプに熱中しようとしているのが見られる（Ⅱ，90）。外から見れば、Fanny は何気なくトランプをやっているように見られるかもしれないが、彼女の心はトランプにではなく、Edmund と Henry Crawford の話の方に向けられていることは勿論であろう。⁵⁾唯控え目で何も知らないかに見え、他の登場人物に殆ど無視されている Fanny が、その実、彼らすべての行為を見、聞き、唯驚嘆しながら、或いは共に感じ、或いは反発し非難しないではおれないのである。そのみか、或る意味では、Fanny は、すべての当事者以上に、知り且つ感じていることが、作中に彼女の心の動きを追うことによって、われわれ読者にも伝えられる。当事者以上にと言うのは、当事者は別にその心情を Fanny に訴えるわけでもなく、また Fanny もその同情や非難を無遠慮に口にすることはないから、外面的に見れば、それらは唯つながりのない当事者個々の孤独な心理現象に過ぎないが、唯 Fanny の意識によってそれらの個々の現象がつながりを持ち、個々の現象以上の意義を担ってくることをいう

5) このトランプ遊びの場面が、Henry James, *The Golden Bowl* の「ブリッジの場面」と同様に、象徴性に富んでいることを、Tony Tanner は指摘する。*The Golden Bowl* のその場面では、表面的には静かなブリッジのゲームに見せて、その下では各人各様の意識、特に Maggie と Charlotte の偽誓による意識の戦いがテーマであったが、この *Mansfield Park* のこの場面もまた Edmund をめぐって Fanny と Miss Crawford の運命が決する象徴的場面ということが出来よう。Cf. Tony Tanner, "Introduction" to *Mansfield Park* (Penguin, 1966) p. 23-24.

のである。⁶⁾ 事実、この作品の第Ⅱ巻の後半から第Ⅲ巻の前半にかけての、Henry Crawford や Sir Thomas を中心とする、Fanny が関知しない、画策の場面、つまり、作品に外側から劇的要素を与える部分を除けば、たとえ客観的叙述によるとはいえ、その大筋は Fanny が目撃し、意識することが根幹となって貫ぬかれ、展開しているといっても決して過言ではない。その意味で、Fanny が素人芝居に参加することを拒んだ自分の立場をいろんな角度から振り返る場面 (Ⅰ, Ch. XVI) や、Edmund が置いていった僅かな用件を認めた短信を手にして、彼を慕う心情を熱狂的に吐露する場面 (Ⅱ, Ch. IX) や、或いは Henry Crawford を拒否した理由を Sir Thomas に卒直に伝えることが出来ず、そのために誤解された自分を思い悩む箇所 (Ⅲ, Ch. I) などの、Fanny が the east room に退いて、思う存分自分の心情を吐き出すところに展開される意識の世界は、Fanny の性格のみならず、作品の形態を理解する上で、無視することの出来ない重要な部分と言えよう。

さて、先に Fanny の参加を阻むものとして、主として境遇や体質や性格といった、いわば、所与の条件のみをあげてきたが、それらの原因はもっと Fanny の意志に関係する主体的なものによる場合も少くないことを言っておかねばならない。しかし、そのことを述べる前に、今一度 Fanny が Mansfield Park に始めてやって

6) Julia が素人芝居から閉め出されて悲しんでいることに関して、次のような文章が見られる。それは、筆者の言わんとしたことを端的に表現したものであり、Fanny の性格を考える上で重要な意義を持つと考えられる。Cf. 'Fanny saw and pitied much of this in Julia; but there was no outward fellowship between them. Julia made no communication, and Fanny took no liberties. They were two solitary sufferers, or connected only by Fanny's consciousness.' (Ⅰ, 207、イタリック筆者)

来た時のことを振り返ってみたい。10才の Fanny が Mansfield Park に到着した時は唯泣き悲しむばかりで、受入れ側の人々を戸惑わせるのみであった。そしてもし誰も彼もが Mrs. Norris のように彼女を扱っていたら、恐らく Fanny は全く違った道を歩まねばならなかったであろう。彼女が真に Mansfield Park に到着することが出来たのは、ひとえに Edmund の「絶対的な親切」(I, 18) に彼女の少くはない感受性が応ずるところがあったからであろう。そして Edmund は彼女の感情教育者となるばかりでなく、兄 William と彼女の心を二分する一番大切な人となり (I, 25)、彼女にとって尊敬と感謝と信頼と優しさのすべてを代表する、かけがえのない人となる (I, 44)。また、Sir Thomas は、その娘 Maria や Julia にとっては、彼女らの感情を抑えるところの、唯厳格なだけの存在に過ぎないが、その厳しさの裏に思い遣りが潜んでいることを理解しているのは、かえって Fanny なのである。Sir Thomas が Antigua への危険な旅に発つ時、実の娘と Fanny がいかに違った風にそのことを受けとめているかを見れば、それは頷けることであろう (I, 38参照)。そのようにして Sir Thomas や Edmund を通じて Mansfield Park における「地方紳士 (country gentry) の伝統」の真髄を、誰よりも、時には彼女の教育者たる Edmund よりも、純粹に継承していくのは、皮肉なことに、Sir Thomas の実子たちではなくして、貧しき縁者から預った、この万事に控え目な Fanny ということになる。けだし Sir Thomas の教育観が疑問視される所以である。Sir Thomas の留守中に、ロンドンからやって来て、牧師館に寄寓することとなった Crawford 兄妹は、「地方紳士の伝統」とは対照的に違った「都会文化」圏からの闖入者であって、「地方紳士の伝統」から見ての、その不健全さ、そしてその墮落振りは、早くも Mrs. Grant の目にとまり、彼女をして「Mansfield Park がきっとあなたたち二人の病気を治してくれ

るでしょう」(I, 57)と嘆かsherめるほどのものであるが、果して Mansfield Park の良風美俗が彼らにいい影響を与えるのか、それとも逆に彼らの墮落した都会文化が Mansfield Park の人々よからぬ感化を与えるのか、大いに興味の持たれる点である。ところが、Maria も Julia も忽ち Henry Crawford の gallantry の虜となってしまうし、Edmund までもが Miss Crawford の許へ足繁く通う仕末である(長男の Tom は最初から、既に都会化し留守勝ちである)。唯 Fanny だけが、Henry Crawford の洗練された態度や演技力や、その美的センスを認め、そしてまた Miss Crawford の時々の親切や思いやりに感謝しないわけではないが、にも拘らずその根底に「地方紳士の伝統」に脅威を与える何か破壊的なものを直視し、内心非難せずにはおれない。だからこそ彼らの素人芝居に参加して演ずることにあれほどまでに抵抗し、また Henry Crawford の求婚を素直に受けることは出来ないのである。つまり、「地方紳士の伝統」をいつくしみ、維持しようという、強い牽引力が片方で彼女に作用していたからこそ、彼女は抵抗し、参加を自ら拒否せざるを得なかったのである。また、あれほど Portsmouth の実家に帰ることを楽しみに思い、その旅路を急ぎながら、実家に着いた途端あらゆる期待が崩れ去り、その雰囲気はどうしてもなじめなかったのも、実は彼女の中にこの牽引力が作用していたからに他ならない。彼女は Portsmouth に帰って、知らず知らずの中に、身についた Mansfield Park の伝統と文化の基準で眺め、比較していることは否めない。母の愛情について「自然の本能はすぐ満たされた。Price 夫人の愛情はそれ以外に出て来るところがなかった。彼女の心と時間は既にふさがっていて、Fanny に与えるような暇も愛情も持ち合わせてはいなかった」(III, 389)と言い、Lady Bertram と比較しながら、「持って生れた自然は殆ど変らないのに、環境がそんなに大きな違いを生じさせるとは…」と嘆ずる言葉に、或いは

Henry Crawford が Portsmouth を訪れて、薦められた晚餐を辞退して帰るのに安堵する Fanny の態度に、培われた Mansfield Park の基準が彼女に生きていることをわれわれは見ないわけにはいかない。手当たり次第に食べる小さな妹にも natural delicacy があるかもしれないが、‘luxury and epicurism’ に育った Henry Crawford にその有様を見られることに彼女は堪えられないというのである（Ⅲ, 406-407参照）。このように Portsmouth を、文化に対して唯自然の状態と見る Fanny の態度から、彼女を snob ときめつける批評家も少くないことは既に述べた。しかしそのことは、作者が、そしてひょっとしたら Fanny 自身も、先刻承知のことだったかもしれない。彼女に近づく Portsmouth の若い女性たちが、准男爵家からやって来たというので最初は敬意を払っていたが、その中に彼女の「勿体振った態度」(“airs,” Ⅲ, 395) が鼻に突くと腹を立てて、問題にしなくなった、と作者は記す。にも拘らず、当の Fanny にとっては、人にどのように言われようとも、それは今ではどうしようもない彼女における真実であることをわれわれは理解しないわけにはいかない。

では、Fanny がそのように固守しようとする「地方紳士の伝統」とは一体何であるのか、しかしそれは手に余る問題なので、ここでは特に気付いたことを二・三記すだけに止めたい。最初に、Fanny が何度か口にする ‘principles’ という言葉に注目してみよう。Fanny は、Edmund が Miss Crawford に欺かれていると受取って、心が千々に乱れながらも、その若き情熱を克服し得るのは、彼女を支えている ‘all the heroism of principles’ (Ⅱ, 117) という意識があるからである（この ‘heroism’ という言葉にも、伝統擁護者としての彼女の孤高の精神が見られはしないだろうか）。また Henry Crawford が妻たるべき素質として Fanny を高く評価するのは、彼女に ‘good principles’ を認めたからである（Ⅱ, 155）。

ところが、相手の ‘good principles’ を認識するだけのセンスを備えた Henry ではあるが、その当の本人が Fanny に ‘principles’ がないと見られているのは皮肉な関係と言う他はない。Sir Thomas が Henry Crawford について「あの人の気立を悪く思う理由でもあるのかね？」と Fanny に訊ねると、彼女は「いいえ、別に」と一応答えて「でもあの人の ‘principles’ については、その理由があるのです」と言おうとして (Ⅲ, 317) 口を嚙む場面がある。また別の箇所、彼女は Crawford に関して「あの方は感情の欠陥を補うべき義務としての ‘principles’ を知らない方です」と言っている (Ⅲ, 329)。このような用例から、これは Fanny にとって、大切な言葉だということが分るが、この同じ言葉を Edmund が Miss Crawford と聖職について論争している箇所でも使っていることを思い出さない訳にはいかない (Ⅰ, 117参照)。Edmund の所説では、‘manners’ とは ‘conduct’ であり、その ‘conduct’ とは ‘the result of good principles’ だという。これらの用例に見られる ‘principles’ とは、辞書によれば、‘personal code of right conduct’ (COD) という ‘moral’ に近い意味でなければならない。一般にはも早道徳とは分離してしまった、唯外面的な作法に過ぎないと見做される ‘manners’ を、Fanny や Edmund がこのように道徳と同義に使っていることは注目に値すべきことで、この点で彼らの ‘manners’ が Crawford らの唯上辺だけの ‘manners’ や ‘gallantry’ とは著しく異なることを忘れるべきではない⁷⁾。ところで、Fanny の今一つよく使う言葉に ‘tranquillity’ というのがある。‘tranquillity, harmony, peace’ とくれば、それらに併行して、Fanny の「自然の荘嚴」(‘the sublimity of Nature,’ Ⅰ, 143)

7) *Mansfield Park*, Vol. I (Kansai U.P.) p. 117, ll.10-11 の注及び David Lodge, *Language of Fiction*, Part II, ch. I “The Vocabulary of ‘Mansfield Park.’” 参照。

を讚美する心情を忘れることは出来ない。序でながら、ここで断っておかねばならないことは、先にも触れたように、彼女が *Portsmouth* の人々について「自然云々」と言った時は、文化の洗礼を受けてない「粗野である」といった否定的な意味であったが、ここでいう ‘Nature’ (大文字で始めている) とは、それとは全く趣きを異にして、天地の現象を包括する第一原理とも言える肯定的な意味を持ったもので⁸⁾、それはも早都会文化が見失った、地方の伝統にのみ残るものと考えられる。そして今一つ触れなければならないことは、‘manners’ が ‘moral’ であるということでは、Edmund と Fanny の考えには略々共通点がみられるが、この自然讚美は、Miss Crawford にうつつをぬかす Edmund には殆ど忘れ去られていて、唯 Fanny の意識だけに残るもので、その点で Fanny は孤独と言わねばならない。Mr. Rushworth が Bertram 家に来訪して、滔々と ‘improvement’ の効用を説き、そのために並木を切り倒すことを弁じ立てるのを聞いて、Fanny は低声で、「倒れたる並木よ」と Cowper の詩を口ずさみながら、並木の悲運に同情している箇所が見える (I, 69)。これを以てしても、彼女が当時流行の ‘improvement’ に批判的だったことが分るが、因みに Henry Crawford は自称 ‘improver’ ということである。また第 I 卷第 11 章では、Edmund と窓辺で星空を見上げながら、Fanny が、‘Here’s

8) ここの ‘nature’ の意味は、OED の IV. 11. にあげられている ‘The creative and regulative physical power which is conceived of as operating in the material world and as the immediate cause of all its phenomena.’ に近いものであって、第 II 卷 46 頁の ‘the first rule and law of their existence’ も、この ‘nature’ に照応する言い換え的表現ではないかと考えられる。

harmony! と始めて、その自然礼讃を口ずさむ箇所があるが、その礼讃振りは聞いていて照れ臭いくらい、と評する研究者も見られる。少くとも聞いている Edmund がそのように皮肉に受け取っているというのである。⁹⁾ しかし、ここで考えねばならないのは、Edmund が Fanny の言葉をまともに受けられない原因として、彼の心が既に Fanny の許を離れ、Miss Crawford らの合唱を楽しむ人々の方に奪われていることである。真剣な Fanny と心ここにあらざる Edmund を対照させて、ひょっとしたら作者の皮肉は Edmund に向けられていると言えないだろうか。第Ⅱ巻第4章にも、Miss Crawford を前にして Fanny が自然 讚美を「熱狂的に語る」(‘rhapsodizing,’ II, 46) 箇所があるが、ここでも Fanny の言葉は聞き手があってもなくてもどちらでもいい ‘rhapsodizing’ であって、相手の Miss Crawford は、その心情を理解するどころか、田舎生活の仕合わせと称して、自然というよりも暗に Edmund との将来を匂わせ、Fanny をぎくりとさせるばかりである。このように何れの場合でも、Fanny の自然礼讃はも早第三者には通じないし、また通じないが故に余計に彼女は最後のよすがとして自然に心惹かれるのかもしれない。最後に第Ⅲ巻の Portsmouth における彼女の言葉を聞いておこう。「3月、4月を町の中で過すことによって、どんな楽しみを失わねばならないか、彼女は今まで考えてみたこともなかった。植物が芽生え、成長することがどんなに彼女を楽しませてきたかを今まで考えてみたこともなかった。…窒息しそうな喧噪の中にいるために、そのような楽しみを奪われることは、自由と新鮮な香りや緑の代わりに、悪い空気と臭いに閉じ込められることは、何にもましてひどいことだった」(Ⅲ, 432) と、

9) *Mansfield Park*, Vol. I, p. 143, ll. 4-5 の注参照。

Mansfield で親んできた自然が、今では彼女にとって、いかになくなてはならないものであるかが、察せられる。

一般に、この作品には三つの世界が描かれているとされる。ロンドンの社交界を中心とした都会文化の世界、Mansfield の地方紳士の世界、そして比較的貧困なために（と言ってもお手伝いさんや召使をおくほどの余裕が見られるが）まだ見るべき文化の域に達していないとされる Portsmouth の世界の三つである。当時の英国社会はフランス革命や産業革命の影響で、急激に近代化の道を歩もうとしていたが、それはまた地方紳士の伝統を中心とした世界から新しい活動的な都会文化への移行を意味する過渡期でもあった。そのような変動の社会の余波は、作中におけるこの地方紳士社会の静かな環境にあっても、ナポレオン戦争による海戦に従軍した海軍士官候補生（後に中尉に昇進）William の報告談や Sir Thomas の Antigua 行に、かすかながら、窺うことが出来よう。そのような変動の激しい時代背景にあって、この作品は、言わば、去り行く地方紳士のよき伝統に満腔の愛情をもって最後の光彩を与えようとした象徴的な作品と言えるかもしれない。

ところで、今一度 Fanny のことに話を戻さねばならないが、必ずしもすべての読者が彼女の性格を手離して賞讃している訳ではない。D.W. Harding や Marvin Mudrick らの批評家は彼女を prig とし受け容れようとはしない。¹⁰⁾そして Mudrick が、その‘vitality’

10) Cf. D. W. Harding, “Regulated Hatred : An Aspect of the Work of Jane Austen.” 有名な論文らしく、*Jane Austen : A Collection of Critical Essays* (ed.) Ian Watt (N.J., 1963) にも、*Critics on Jane Austen* (ed.) Judith O’Neill (Florida, 1970) にも収録されている。See also “The Triumph of Gentility” in Marvin Mudrick, *Jane Austen : Irony as Defense and Discovery* (Princeton, 1952)

の立場から、一篇のヒロインと目するのは、却って Mary Crawford の方である。ところが Mudrick の所説とは反対に、Fanny の 'negative' な面にこそその美点を求め、彼女をロマンチックならざる Christian heroine と位置づけるところに、L. Trilling の批評の特徴が見られる。¹¹⁾ 確かに、生きるための 'vitality' は人目を惹き易く、Fanny のような性格は不可解とされがちである。その意味で、Edmund が人生の伴侶としてまず Mary を考えたのも頷けないことはない。そして活気溢れる Mary は Edmund がつこうとしている聖職に飽き足りないものを感じるのも、従って、そのために、Edmund が結婚と聖職のジレンマに立たざるを得ないのも、そして結局は Edmund が Fanny に結ばれる顛末に、Edmund の側から見れば、この作品の主題が一応 'ordination' であるとされるのも、¹²⁾ あながち理由のないことではない。Mary と較べて Fanny の美点は、彼女の最も良き理解者とされる Edmund にすら、皮肉なことに、最後になるまで分らなかつたが、分らないということでは、様々な Fanny 論が見られることから、われわれ読者に於ても同然と言うべきかも知れない。しかしながら、私の理解した限りでの彼女の肖像を何とか私なりに試みなければならぬ。

先ず最初に、控え目で口数少い彼女にしては、相手に抗ってまで自分の意思を通そうとして目立つ箇所が二つある。その一つは、彼女が牧師館に招待された時のことで、彼女の意中を全く解していな

11) Cf. Lionel Trilling, 'Mansfield Park,' in *The Opposing Self* (London and New York, 1955)

12) Cf. *Jane Austen's Letters* (ed.) R.W. Chapman (O.U.P. 1952) p. 298. よく引用される Now I will try to write of something else, and it shall be a complete change of subject—ordination.' という書簡中の文章と、作品の関係については、テキスト 103頁及び同頁 1.29 の注参照。

い Henry Crawford は、Sir Thomas の帰国がもう一週間遅れていたら、素人芝居も予定通り出来て、どんなによかったとか、と言って彼女に同意を求める。すると彼女は「私としては、伯父さんの帰国が一日たりとも遅れて欲しくはありませんでした。伯父さんが帰られた時、あの芝居を全面的にお認めになりませんでしたから、私の考えでは、何もかも全く行き過ぎだったと思っています」(II, 66) ときっぱり言明して、われわれ読者をハッと驚かす。そして「彼女は生涯で一度にそんなに多くのことを話したこともなかったし、また誰に対してもそんなに怒って話したこともなかった」(II, 66) という注釈が続く。今一つの箇所は、Sir Thomas が、Henry Crawford の正式の求婚を Fanny に伝えた時の、彼女の返答振りである(III, 314参照)。この時の彼女の言葉もまた、前の場合に劣らぬくらいに、きっぱりとその求婚を拒け、Sir Thomas の期待を無残に裏切るものであり、そのために Fanny は「勝手気ままな、頑固な、利己主義の、恩知らずの現代娘」(III, 318-19) という、この上なく酷い誤解を招く。平生おとなしい Fanny が、これらの場合に限って、そのように激しい言葉を返すのは、Henry Crawford が、どんなに gallant 振りを発揮しようとも、畢竟「地方紳士の伝統」の破壊者でしかない彼女の目に映ったからであろう。しかし彼の courtship は、Fanny の後を追って、Portsmouth に場所を移してまでも続けられ、変らぬ求愛を続ける Crawford に漸く読者の同情が傾き、どこまでもその求愛を拒け続ける Fanny は、時には prig の名の下に、或いは、彼女は生身の女性ではなく、道徳の「規範」(norm) を示す以外の何物でもないといふ非難されることも稀ではない。¹³⁾ つまり、彼女の美点と目されてきた道徳的側

13) Marvin Mudrick, *op. cit.* p. 179.

面そのものが、批判の対象とされるのである。だが果して彼女は、そのように批判されるべき prig にすぎないのであろうか。

確かに、Fanny に接近する Crawford の最初の動機が、flirtation のそれにすぎないし、従姉の Maria に対する彼の flirtation の記憶も失せてない Fanny が容易に彼を寄せつけないのも頷ける。ところが彼の求愛が徐々に真剣なものに変貌していくのではないかと感じられるのに、それに応じようとしなない Fanny が余りにも priggish だと受取られるのも無理からぬことである。ところが第Ⅲ巻の後半辺りに来ると、彼女自身に「不思議な心の転換」(‘a strange revolution of mind,’ Ⅲ, 393) が起り、彼女は Mary Crawford からの手紙を待ちわびるだけでなく、少なからず Crawford の方に傾斜していくのを見落すわけにはいかない。一方、丁度そんな矢先に、何の前触れもなく Henry Crawford と Mrs. Rushworth の駆け落ちという突発事件が起る。一体この突発事件を如何に解釈したらいいのだろうか。これまで Portsmouth まで Fanny の後を追って来た Henry の求愛は Mrs. Rushworth の浮気の誘惑にうちかつ程に純粹ではなかったというのであろうか。あれほど真剣に見受けられた彼の求愛も、やはり ‘rather eager than lasting’ (Ⅱ, 80) という、彼の厭き性を証明する以外の何物でもなかったというのだろうか。ともかく、この筋の発展は、これからも賛否の分れるところであろう。¹⁴⁾

その突発事件は Miss Crawford や他の人々からの書簡、そして Mr. Price が偶々手にした新聞の報道という間接的な手段で知

14) Jane Austen 自身が集めた MP に対する見解の中に、このくだりの筋立てについて賛否両論が見られることは興味深い。 Cf. *Jane Austen: Sense and Sensibility, Pride and Prejudice and Mansfield Park, A Casebook*, (ed.) B.C. Southam (London and Basingstoke, 1976) p. 200.

らされるだけで、それ以上の具体的なことは何も知らされない。事件がこのように間接的な報告のみによる場合、当事者がその事件を如何に受取るかによってすべてが決着する。だとすれば、そのような narrative は、作者にとって便宜であると同時に、それが本当に真実かどうか疑わしいという印象を免れない demerit を併せ持たねばならないだろう。では、そのように功罪相半ばする「書簡形態」(epistolary style) の narrative を、第Ⅲ巻の後半でこの突発事件その他を導入するために、作者は何故採用したのだろうか。その点で、作者の狙いは、そう簡単には理解出来ないことだが、敢えて推測を試みるならば、一方では Fanny が決して言われるように固いだけの prig ではない印象を与えておいて、その傾向が都合が悪くなるまで進行しないようにと、彼女の意思とは無関係な突発事件を設定して、作者が本来狙いとした「地方伝統の擁護者」という資格を彼女に付与しようとしたのではなかろうか。そうだとしたら、この筋の運びは、依然として Crawford の側に一体何が起ったのか曖昧な点が少くはないけれども、やはり作者にとっては相反する二つの狙いを一挙に解決してくれる、またとない好都合な、いや、快心の touch だったかもしれない。

Fanny を prig として切り捨てる批評家たちの見落としがちな点は、Edmund が夙に認め、そして Henry もその故に彼女を求めるところの、彼女の健全なモラルに匹敵する、豊かな感受性と、必ずしも欠点がないとは言えない彼女の極めて人間的な側面であろう。例えば、Sir Thomas が Antigua に発つのを見送りながら、一瞬、厳格な伯父が留守になることに、従姉たちと同様に安堵しながらも、より深い次元で涙を流さない自分を、「恥ずべき無神経」(‘a shameful insensibility,’ I, 38) と嘆いたり、新婚旅行に発って行った従姉たちに対して、「彼女らはそれに値いすることは何もしていないのに、愛情の念で懐んだり」(II, 39)、彼女に一片の同

情も示したことの無い Norris 伯母に対してすら「貧寒とした小さな家に住む、この伯母に対して、その直前に一緒にい合わせた時、何かちよとした心遣いが、自分の側に欠けていたのではないかと自分を責めないではおれなかったり」(II, 140)、或いは作品に一貫して辿ることの出来る、兄 William や Edmund に対する優しい感情は殊更に取上げて言う必要もないであろう。反面、‘unworthy feeling’ (II, 109) と知りながら、ますます募る Miss Crawford に対する嫉妬と反感、そしてまた Edmund に対する、尊敬と愛故に余計に募る不満と葛藤——時には、Edmund が苦しむのを見て、快哉を叫ぶほど奔放な感情に彼女は駆られたりもする(II, 136)——それは作品の終り近くでは、抑え切れない衝動的な怒りともいうべき激しさに嵩じるのが見られる(III, 424参照)。このようにして、Fanny の中に、‘unworthy feeling’ と称せられる感情を拾い上げていけば、いくらでもあげることが出来ようが、それらは彼女が *prig* ではあり得ない証拠であり、またたとえそれらのものが彼女の弱点だとしても、そこにこそ彼女の人間の側面が窺われ、それが彼女の、作品の、魅力の一面を形成していると言いたい。唯忘れてならないことは、最初は奇異に感じられるほどに、時にはもどかしいほどに、Miss Crawford に対する嫉妬心や、Edmund に対する愛情を、彼女が一度たりとも口にしないことである。¹⁵⁾ そればかり

15) このことを Fanny は感情を ‘restrain’ するとは言わないで (Maria については、‘restraint’ という言葉が使われている。Cf. II, 36, l.15 and l.27. これは自分の意志に反して外から抑えられることを意味するのであろう)、‘tranquillise herself’ (II, 116) とか‘(have) *regulated* her thoughts and comforted her feelings by this happy mixture of reason and weakness’ (II, 118, イタリアック筆者) といった表現を使っている。

でなく、常人だったら、つい馴れ馴れしさから口にするのを、彼女はハッと思い直して、口を嚙むのが顕著に見られる。Mansfieldでの初めての11月が、Miss Crawford にとってどんなに退屈なものになるかを案じる Edmund に対して、「趣味や、教養や、元気さや、身分や、友人やらで、そんなことあり得ませんわ」(II, 32)と言おうとして、Fanny は、一呼吸おいて、結局何も言わない、彼女が間違っただけで *'seemingly unhandsome'* (II, 32) なことを口にしてはいけないと思ったからである。*'seemingly unhandsome'* なこととは、自分の嫉妬心を露呈することを指すのであろう。また Sir Thomas に Crawford の求婚を受けない理由を訊ねられて、彼女は絶対に真実を告白すまいとする、告白すれば従姉たちの行為が露見するからである (III, 316-17 参照)。また、素人芝居に出たくなった Edmund が Fanny に忠告を求めた時も、彼女は何の確たる返事を与えていないし (I, Ch. XVI の後半参照)、同様に Miss Crawford にひどくあしらわれた Edmund が、思案が余って、Fanny の忠告を求めて、彼女の部屋に駆け込んで来た時も、Fanny は「お話を聴くだけでしたら、私は出来るだけお役に立ちましょう、ですけど私は忠告者として適任ではありません。どうか私などから忠告を期待しないで下さい。私にはその能力がありません」(III, 369) と、考えようによっては、随分と冷やかな返答しか与えない。更に、Crawford が領地の検分にもう一度「行くべきでしょうか、あなたはそうするよう忠告なさいますか？」と訊ねた時、Fanny は「忠告ですって？——どうすべきかは、あなたご自身がよくご存じでしょう」と答え、更に「私たちは皆、気を付けさえすれば、他人の誰にも優るよき案内者を自分の中に持っているのです、…」(III, 412) と言って、Crawford への忠告を控える。とりわけ、驚くべきことは Edmund が *'My very dear Fanny'* 云々と認めただけの紙片に熱狂するほど (II, 117) に、彼を慕っている

Fanny なのに、その思いを、ついぞ Edmund に伝えようとしなのは何故なのだろうか。それは、単なる彼女の 'modesty' なのか、それともそれがいわゆる彼女の 'principles' であり、'decorum' なのか、或いはそれが彼女特有の 'romantic delicacy'¹⁶⁾ というものなのだろうか。ともかく、彼女のこのような側面に私は Henry James の、例えば「密林の野獣」("The Beast in the Jungle") における、相手の個性を尊重し、遂に愛を告白することなく死んでいった May Bartram の面影を想起しないではおれない。

Crawford が Fanny に注目し始めた時、彼は「僕の計画は Fanny Price が僕を愛さないではおれないようにもっていくことだ」(II, 229) と妹に言い放つ、そしてそれに続く彼の長い courtship は、この言葉の延長線上にあることは勿論であろう。また Miss Crawford は結婚の条件として Edmund に聖職を断念させようと働きかける。Sir Thomas も Crawford との結婚を良縁と決めこんで Fanny に是が非でも押しつける。そして父や Miss Crawford の意向を受けた Edmund までも同じである。(僅かに兄の William だけは、それを望みながらも、妹の心を察して、それを口にすることを控えている、III, 375参照)。これらの人々に共通して見られることは、すべて自分の意思を他者に押し付け、「支配し」(dominate) ようとしていることである。そのことは、'between ourselves' とささやきながら、いろいろと企む Mrs. Norris にしても、或いは Lady Bertram の自己中心にも、そして放蕩息子の Tom の Fanny をあしらう点にも等しく見られる傾向と言える。そんな中であって、「私たちは皆、気をつけさえすれば、他人の誰にも優るよき案内者

16) Fanny は、娘を Mr. Rushworth のような人に結婚させた Sir Thomas から romantic delicacy を求めても無理だ、と言ってこの言葉を使っている (cf. III, 331) から、それが彼女の行動を律する一つの基準と見て差し支えないだろう。

を自分の中に持っているのです」という言葉にみられるように、他者の自我を尊重し、その中へ踏み込むまいと誓うのは、一人 Fanny だけということになる。¹⁷⁾ 彼女のこのような性格は、結婚の条件として聖職の断念を Edmund に迫った Mary と今一度比較するならば、尚一層の感銘を与えないではおかない。地味で、控え目で、新しい社交界の流行に背を向け、習慣と伝統の擁護者である、このヒロインの中に、やがて George Eliot や Henry James を経て現代につながる、このような心理的デリカシイを発見することは、驚異と言う他はない。Q. D. Leavis は、主として技巧面から、この小説を「英国における最初の現代小説」と言っているが、¹⁸⁾ この小説が最初の現代小説と言えるのは、唯技巧面だけに限るものではない、と言いたい。(多田敏男)

17) このような心理的側面から、この作品にアプローチした論文に、Thomas R. Edwards Jr.; “The Difficult Beauty of *Mansfield Park*” in *Critics on Jane Austen* (ed.) Judith O’Neill (Univ. of Miami Press, Florida, 1977) がある。

18) Cf. Q. D. Leavis, ‘The First Modern Novel in England,’ in B. C. Southam (ed.), *op. cit.*